
猫の悩み

怠け王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の悩み

【Nコード】

N4961Z

【作者名】

怠け王

【あらすじ】

大学生の志賀という人物が、ベランダで猫に遭遇する話です。

猫の悩み

夜の十時ごろ、チェーン古本屋のバイトを終え自分のアパートに帰ってきた。スーパーで買った値引きのラベルが貼られた納豆巻きと冷え切ったハムカツ、アルコール度数高めチューハイを二缶、コタツテーブルの上に置いてテレビを付けると、ダウンタウンの浜ちゃんが水戸黄門のお銀のコスプレをしていて、それを見た松ちゃんがあひひひひひひ、と笑っていた。

僕はミニコンポの電源をつけて、端子にヘッドフォンの先を突き刺し、コンポの口にCDをはめ込む。コンポはそれを静かに飲み込んでいった。最初はFUGAZIやWIPERSなどヘビイなパンクを聴いていたが、酔いが回ってくるにしたがって、カバンに入れっぱなしになっていたipodをコンポに突き立てて、ゴンチチやボサノバ系の曲を聴いて良い気分だった。見もしないのにテレビは点けっ放しだった。だいたい、僕は酒を飲んで音楽を聴くと意識がそちらに行ってしまうて、目の前のテレビの画面に何が映っているかなんて気にも留めない。

そのうちだんだんと眠気と疲労を感じるようになって、テレビの上に載せてある四角い目覚まし時計を見ると十一時半になっていた。コンポの電源を止めた。ほんとは停止ボタンを押してから電源を消すべきなのだが、曲を再生中に電源ボタンを押したので、しばらくの間コンポは不機嫌な音を立て、それから電源が落ちた。ハムカツは食べきれず一枚残した。

シャワーを浴び、歯を磨き、コンタクトレンズを洗浄しようとして、もう二週間以上使いつぱなしだった気がしたので、人差し指にくっついたレンズをそのまま水に流した。レンズは変なとこにしばらくくっついている。それからベットに横になって、図書館から借

りてきたのに読みきれず返却期限が迫っている本を開いて目を通して始めたが、眠気と疲労と酔いで文字を目で追う事になんだか集中できなくて、電気を消して寝ることにした。外から強い風の音と共に猫のオス同士が喧嘩でもしてるのか、遠くの方から恐ろしげな声が聞こえてくるのを耳にしながら、意識が遠くなっていた。

夜中、唐突に目が覚めた。物凄い尿意。暗闇の中を立ち上がり、床に落ちていた何かを踏んだ。バキッ、と何かが破損したような音がした。うわあ、と思って電気をつけて確認しようとしたが、暗闇の中で眠りから覚めた直後に急に電気をつけて、目がしびれるように眩しくなるあの感覚が僕は苦手で、だから明日確認すりゃあいいと思い、トイレに行って電気を点けたら目がしびれるように眩しかった。出すものを出し、水をコップ一杯飲んで、またベットに仰向けになり眼をつむったが、外のほうからなんだか妙な音が耳に入ってくることに気付く。

みー、みー、と僕には聞こえる。本当にか細い声である。小鳥の声かと思った。スズメでも鳴いてるのかと。でも、スズメはみーみーとは鳴かないし、じゃあ他の種類の鳥だろうか。みーみー、はずっと続いている。僕は体を横にして、テレビの上においてある時計を見た。針が蛍光塗料でぼんやり光っている。二時五十分前。おかしいなと思う。鳥が鳴きだす時刻にはちよつとまだ早すぎる。

みーみー、という鳴き声らしき声はか細くずつと続いている。みーみー、と鳴く鳥といったら何だろう。一応、昔、野鳥の会に入っていた事もあったし、鳥の種類には詳しいはずだったのだけど。このあたりで普段見られる鳥っていったら、スズメにヒヨドリにツグミにカラス。そのどれもがみーみーとは鳴かない。フクロウはほーほーだし、ツバメはなんだか複雑な鳴き声をする。どっかの森から紛れ込んできた変な鳥でもいるんだろうか。そう思って、寝た。

朝、起きて、トイレに行って歯を磨き、りんごの入ったヨーグル

トを食べながらぼんやりとテレビを見た。占いによると蟹座は何か新しい出会いがあるそうなので、積極的に外に飛びだそう、という事だった。ラッキーメニユーはきのこそばだった。なんやねん、きのこそばって。ヨーグルトの容器を水でちよつと洗ってゴミ箱に捨てる。何かを食べてその容器を洗わないまま捨てる、時間が経つうちゴミ箱から変なにおいがしてくる。だから、捨てる前に容器は軽く洗ったほうがいい。

洗濯をしようと思って、昨日使ったタオルや下着や、洗ったほうがよさそうなものを集め、洗濯機の中に入れて、適当な量の洗剤を入れてスイッチを押すと、蛇口をひねってなかったので、ぶー、と音が鳴って、はいはい、と言いながら蛇口をひねると水が出る音として、それから黙々と洗濯を始めた。それから部屋に戻ってカーテンをざつと開くといい天気。ここ何日はぼんやりとした天気だったので、そろそろ枕とか干したいなと思ってたからちょうど良かった。ベランダのサッシをガラガラと開けた。それから、僕は立ち尽くしたままその場に固まった。

ベランダの隅に開いたままのダンボールが置いてある。実家からたまに送られてくる、米とかレトルトの食料品が入っていたダンボールだ。僕は救難物資と呼んでいる。僕が住んでるこのあたりはゴミの分別が厳しく行われていて、ダンボールなどの資源ごみの日は土曜日と決められている。そして回収に来るのがけっこう早い。土曜日に大学の講義は入れてないから基本的に休みなので、午前中は死んでる。だからなかなかゴミに出せないまま仕方なくベランダに出っぱなしになっている状態だった。

その開きっぱなしのダンボールの中に、小さくてふわふわしたまるいものが4つ入っていた。

そのうちのひとつ、真っ白いふわふわしたまるいのが動き出し、僕のほうに顔を上げ、それから聞き覚えのある声で、みーみー、と鳴いた。その後を追うように、もうひとつ白いのと、まっ黒いのと、白い体にとこどこ黒い模様がぼこぼこ付いているのも顔を上

げて僕を見て、みーみー、みーみー、みー、と一斉に鳴き始めた。ダンボールの中には4匹のまだ生まれたばかりの子猫が入っていた。昨夜、外から聞こえてきた鳴き声は変な鳥の鳴き声ではなく、この子達の鳴き声だったのだ。

唐突にベランダに4匹のふわふわの子猫がいるのを目にして、僕の寝ぼけた脳みそは急激に覚醒した。そして、目覚めた脳の中のだいたいの4割くらいは、「うわあ、なにこれ、ふわふわ、かわいい、かわいい」などと考えていた。実際、ダンボールの中のふわふわはとてもかわいい。

では、残りの6割は何を考えていたかというと、「うわあ、どうしよう、なんでこんなことに・・・どうしよう、これ」とかなりパニックに陥っていた。なんとも情けない事だが、パニックに陥るのにはそれなりの理由があった。

僕は動物アレルギーである。

動物アレルギーといっても、毛が生えていてふわふわしている動物限定だ。トカゲとかカメとか魚は大丈夫。だから、僕がもし家で何かペットを飼うのだとしたら、トカゲとかカメとか魚になる。今、僕の実家では金魚を飼っている。これまで、家で何かペットを飼うとなった場合、僕のこういった事情によって、魚ばかり飼っていた。グッピーにメダカにドジョウに熱帯魚などなど。

飼っていて思うだが、グッピーとメダカに感情移入はできない。体が小さいのに比例して、こいつらは頭が悪く、こちらが愛情を注いでやってもそれに見合う反応をしてくれないからだ。中くらいの金魚ほどのサイズになるとさすがに反応が違う。家に帰ってくると餌をやる人間の顔を覚えているため、水槽の水面に顔を近づけばくばくする。僕は、ただいま、ただいま、と言いながら、いつものフレイク状の餌を、そんなにたくさんではなく、ほどほどの適量をやさしく水面に散らしてやる。

それはともかく、子供の頃、僕の動物アレルギーはひどいものだ

った。ふわふわした動物に触れると、そのうちに呼吸に違和感が出てきて、ひどい時は発作になる。まるで気管支ぜんそくの発作だった。呼吸を死ぬほじしたいのにできないという苦しみは、それを味わった人間にしか分らない。病院の緊急病棟で消毒液のにおいに包まれて点滴を受けながら、人が死ぬ前ってこんな感じなのかな、と幼心にそう思ったこともある。

今はもうだいぶ改善されて、発作の症状が出るほどひどくはない。ただ、やっぱりふわふわした動物を触ると、手の先からだんだんと痒みが腕の表面を這い上がっていき、ひどい時は腕全体に湿疹ができる。そのときは病院で処方された専用の軟膏を塗らなければならぬ。発作は起きないけど、肺の中の管に何かが詰まっているような不愉快な感覚はいまだに感じることもある。それくらい、僕の動物アレルギーは根深い。

そして今、あるうことが眼下にふわふわの子猫が4匹、ちょこんとダンボールの中にうずくまって僕のことを見上げているではないか。そりゃあ、パニックである。

この子達をとりあえずどうすればいいだろうか。このまま、ベランダに放っておくというのもどうかと思うし、かといって一匹ずつ手で持ち上げて家の中に入れたりしたら、アレルギー反応が起き、全身が痒くなって大変なことになるそうだ。だいたい、この子達を産み落とした張本人はどこへ行ったのやら。よりによって、動物アレルギー持ちの僕の家の前で育児放棄されるとは思わなかった。空は雲ひとつ無い晴天だ。日光が僕と子猫たちに平等に降り注いでいた。このまま日の下に置いては衰弱してしまう気がする。乾いた太陽の光が、この子達から体の水分を徐々に奪っていくようなイメージが頭の中に湧いたからだ。

とりあえず、子猫が入っている段ボール箱の端っこを持ってうす暗い家の中に入れた。子猫たちはみんな、みゃあみゃあ鳴いた。黒いのが立ち上がってダンボールの側面に爪を立てて、大胆にも脱出

しようとするので、ああ、だめだめ、と言って箱を揺らすと、後ろ向きに転がって、それからあたりをきよるきよる見渡した後、実際見えているのかいないのかよく分からない瞳をこちらに向ける。そして、みゃー、と鳴く。鳴かれてじつと見られても僕は困るよ。

六畳の部屋の中心に4匹の子猫が入った箱を置いて、さて、どうしたものかこれは、と腕を抱えて真剣に悩んだ。子猫たちは今、段ボール箱の隅の一角に4匹とも固まって、ひとつのふわふわした物体のように化して、それでも二つの瞳をそれぞれ僕に向けて見ていた。みんな耳がぴんと立っていた。

みゃあ、みゃあ、みー、みー、と鳴き声が漏れる箱を床においたまま、こちらは、うーんうーん、と鳴き声ではなく唸り声を上げながらあれこれと僕は考えこんでいた。まずはつきりしているのは、僕はこの子達を飼育する事はできない。アパート暮らしだからという理由よりなにより、僕自身が猫を飼える様な体質ではない。すると、やっぱり誰かに代わりに飼って貰うしかないのではないか。色々と考えをめぐらせて様々な人物の顔が頭に浮かんできたが、僕の大学の友人や知り合いのほとんどはアパートでひとり暮らしをしているか、実家暮らしだとしてもマンション住まいだったりして、急に子猫を受け入れてくれるようには思えない。

このダンボールを道の隅に置いて、『アパートのベランダで子猫が生まれました。しかし、動物アレルギーで飼う事ができません。勝手なお願いで恐縮ですが、だれかこの子達を代わりに飼っていただけませんか。お願いします』と書いた紙でも貼ってそのまま放置する、というアイディアも一瞬浮かんだが、それではあまりにも責任感が欠如していてどうかと思う。そもそも親猫の責任感の欠如によってこの子達は僕のベランダに置きっぱなしになっているのだから、その親と僕が同じ事をしたって意味が無いような。

一番いいのはこの子達の親猫を探しだし、その親に引き取ってもらう事だ。それがこの子達にとっても一番自然で幸せな選択ではないかと思う。しかし肝心の親猫がいったいどこをほつつき歩いてい

るのか、僕には見当もつかない。どんな姿をしているのかすら分らない。生まれた子猫は真っ白いのが二匹と、真っ黒いのが一匹と、ぶちが一匹。黒と白のモノトーンカラーという以外、まるで共通点の無い子猫たち。これでは親猫を探すのはとても難しそうだ。

さらにさらに考えをめぐらせていくうち、ああ、そうだ、と思った。アパートの大家さんに相談をしてみよう。なにかいい解決策を教えてくださいませんか。昔、ある光景を見たことがある。アパートの大家さんは夫婦でアパートの管理をしているのだけど、おばさんの方の管理人さんが猫に餌をやっているのを見たことがある。このあたりは学生のための家賃の安いアパートが集中している地域なのだが、それと関係あるのかどうかは知らないけど猫は多い。朝、生ゴミを出しに行くと、ゴミ捨て場で猫とカラスがゴミを巡ってけんかをしていたりするし、ちよつとその辺を歩くだけでも寝そべっている猫の姿はよく見かける。その寝そべっている猫に、管理人のおばさんが煮干の頭をもぎったやつを猫に与えていたのを、大学の帰りに見かけたことがあるのだ。

もしかしたら相当の猫好きなのかもしれない。もしかしたら、このあたりに猫が多いのはそのおばさんのせいなのかもしれない。すると、僕のベランダで子猫たちが生まれたのも、そのおばさんに多少なりとも原因があるのかもしれない。そうか、謎は全て解けた。じゃあ、この子達が生まれた責任を多少なりとも背負っているであろう、管理人のおばさんに相談しに行くことにしよう、と思い立ち、ジーンズをはいて、アルファベットでどこかの大学の名前が書いてある灰色の長袖Tシャツを着て、その上にどこで買ったかよく覚えていない黒いカーディガンを羽織って、コンバースを履き、みゃあみゃあと鳴き声が湧く段ボール箱を持って玄関を出た。

管理人さんが住み込みで常駐している部屋はすぐ近くにある。僕のアパートから道路を挟んで真向かいのアパートの一階だ。不在のときは「今、いません」というボードが入り口脇の釘止めにかかけられているけれど、今見たところそれが無いのでどうやらいらっしや

るらしい。ダンボールを両手に抱えて、てくてく、道路を渡る。段ボール箱の中には4匹の子猫がいるのに、箱自体は何も入れていないのと同じくらい軽く感じる。入り口の引き戸の横のインターホンを押すと、しばらく間があった後、「はい、はい、どちらさまでしよう?」と、ざらついたノイズと共におばさんの声が返ってきた。「すいません、三号棟の2号室の志賀です。ちょっとご相談したい事がありまして、今、お時間ちょっといいですか」

と、インターホンのマイクに向かって話すと、「はいはい、いまちよつと待って下さいねえ、ちよつと、トイレ行きたいもんですから、うふふ」と返ってきて、入り口前で5分ほど待った。向かいの僕のアパートの二階の部屋のドアが開いて、なんだか妙にきつちりとした清潔な身なりをした学生が階段を降りてきて、アパート前の駐輪場においてあった自転車を引つ張り出すと、大学の方に向かつて僕の前を走り去っていった。きつちりとした服装のくせに、自転車が赤錆だらけだった。

後ろの引き戸が開く音がして振り返ると、おばさんが立っていた。「はい、どうぞどうぞ、お入りください」と中に入っていた。と中にいざなわれるので、「失礼します」と中に入っていた。

おばさんに、僕がこのダンボールの中に入っている子猫たちといったいどんな状況で遭遇したかという事。そして、僕には体質的な問題があつて猫を飼う事はできないという事。僕の友人や知り合いにも簡単に猫を譲ってくれそうな人が思いつかない事。などなどをちゃんと説明したのだけど、その説明を聞いているのかいないのか、おばさんは「うひゅー、ふわふわ、かわいい、かわいい」などといながら、箱の中のぶちの子猫を自分の両手に包み込んで悦に入っている。

厚ぼつたい皮膚の壁に包まれた子猫は、ふみゃあ、ふみゃあ、とおばさんを見上げて鳴いた。おばさんもその子猫の声に答えるように「ふみゃあ、ふみゃあ」と鳴く。別にあんたは鳴かなくなつてい

いんだよ。

「どうしたの、この子達。どこで見つけたのお？」

と、おばさんがキラキラした瞳で僕を見上げて聞くので、ああ、聞いちゃいなかったんだなということが分かった。再度、どこで出会ったか、体質の事、友人と知り合いに飼ってくれそうな人が思いつかないことをまた一から丁寧に説明をした。説明している間、おばさんはしきりに「なるほど、なるほど」と言いながら相槌を打っていた。

「なるほど、よく分かりました」

一通り説明をし終わるとおばさんはそういつて、さっき僕がしたのと同じように、腕を抱えて、うーんうーん、と唸り始めた。狭くて殺風景な事務所の部屋の中に、おばさんの、うーんうーん、と子猫たちの、みーみーみーみーみー、という音だけが響く。おばさんは目をつぶってけっこうな時間、必死に何かを考えているようだった。「…………あのね、うちで飼ってあげてもいいと思ったんだけどね……………」

「えっ、ほんとですか」

こんなにあつさりと子猫たちを引きとってもらえる事になるとは思わなかったので、非常に驚いた。やるなあ、おばさん。あんた最高……………」

「…………ああ、やっぱりだめだ、うちでは飼えない」

「ええ……………」

一瞬の内に振り出しの状態に戻されてしまった。

「どうしてもだめですか？ やっぱり」

あきらめきれずにおばさんに再度聞いてみると、再び腕を抱えてうーんうーん、唸りだした。僕は仕方なく、おばさんが眼をつむって唸り続けるのを、立ち尽くしたまま見ているしかなかった。唸り続けるおばさんの姿は、なんというか、腹が痛くて苦しんでいる人の姿にも見えなくは無かった。

「・・・大丈夫ですか？」

別に大丈夫だとは思っただが、一応、おばさんに声をかけた。すると、おばさんは目を開き、僕の顔を、ひたつ、と見つめた。

「あの、やっぱり色々考えたんだけどねえ、やっぱりうちでは飼えない。まあ、本心としてはね、こんなかわいい猫ちゃんだったらもう喜んで喜んでうちで譲り受けたいところなんだけれども、ちょっと、現在のうちの状況というか・・・それがね、この猫ちゃん達を飼うのにちょっとあんまり適さないというか、いま飼っちゃうとねえ、不安な部分があるんですよ」

「はあ・・・」

子猫を飼うのに不安な部分というのは何だろうか。

「・・・あの、犬とか飼ってるんですか？」

普通、多くの家では猫と犬はいっしょに飼わない。だいたいどちらかである。金がかかるし、飼育方法の違いなんかもあるだろうし、だいたい毎日、犬猫同士で喧嘩が絶えない感じがする。たまにテレビの動物番組なんかで犬と猫がお互いの垣根を越えて、まるで同じ腹から生まれた兄弟のように仲むつまじく生活している様子が映り、それを見て人は、かわいかわい、と盛んに言うけれど、どこにでもいるような平凡な犬と猫がちょっと仲良くしているだけかわいいと言われるのは、逆に考えるとその様子というのが現実には非常に珍しい光景だからこそそう思われているのかもしれない。実際、世の中のほとんどの犬と猫は仲が悪いんじゃないだろうか。だから、おばさんが猫を飼えないのは、犬、もしくは猫と取っ組み合いの喧嘩をしそうな他の動物を飼っているからではないか、と推測して聞いてみた。

「いえいえ、犬はうちでは飼ってません。私も主人も犬はちょっと、趣味ではないんですよ」

「そうですか」

「ええ、ただ、うちの主人がねえ、ちょっと他の人と比べて変わった動物の好みがあってねえ、で、けっこうその類の種類の動物をう

ちで飼ってるんですけどお、その子たちと猫ちゃん達と一緒に同じ屋根の下で暮らさせるのはちょっと心配なんですよお」

「はあ」

「うん、下手すると、どっちかがどっちかを食べちゃうんじゃないかしらねえ」

「ええっ」

「いや、実際どんな感じになるかはわからないけれど、ちょっとね、お互い考えてる事もだいぶ違うでしょうし、こう、うまくやれる気がしないと言いますか、そんな感じがするんですよえ、はははは」
「そうなんですか」

「・・・で、その、主人が飼っているペットというのがね、今ちょうど、部屋の奥にいるんだけど・・・見たい？」

「えっ？」

「見たい？ 主人のペット。なかなかいないわよお、日本でもこんな飼ってるのはねえ。見たい？ 見たい？」

「はあ・・・んじゃあ、見ます」

「ふふ・・・じゃあちよつと待っててねえ」

おばさんは部屋の奥に消えた。そういえば、管理人のおばさんの方と話したのは、たぶん今回が初めてだ。いつもはおじさんの方が事務所に常駐しているので、おじさんとか話したことはない。あまり印象に残らない人で、淡々としているというか、しかし、逆に奥さんの方がインパクトがあるというか、愛嬌があるというか、印象深い人である事が今回分かった。それにしても、あの淡々としたご主人が飼っている変わったペットとは何だろうか。期待より、やや不安の方が大きいのは何故だろう。

なかなか奥から出てこないおばさんを待ってる間、床に置かれたダンボールに入っている子猫たちを立ち膝で眺めていた。子猫たちは4匹ともよちよちと覚束ない足取りでこっちへ寄ってきて、8つの黒い瞳を僕に向ける。動物アレルギーが無かったら、持ち上げてじっくりと相手をしてあげられるのだけど、僕にはそれはできない。

見ていることしかできない。ただ見ているだけなのに、器官に埃でも入り込んで少し肺が痒いような感覚がしていた。

「おまたせえ」

彼氏を待たせていた彼女が吐いた台詞のような、あのおばさんの見た目から想像出来る年齢の人物から発せられてると思うと、かなり気味の悪い声が聞こえて僕は顔を上げた。そして、僕は固まった。今日は朝から固まってばかりいる。

おばさんが両手で抱え込んで持ってきたご主人のペットというのは、僕の想像していたものを遥かに越えていた、とまではいかないまでも、ある程度驚愕に値する代物だった。毛の無い青緑色の体表、全身を覆う鱗、揺れる細長い尻尾、白く鋭い四肢の爪、大きく開かれた口から飛び出る紫がかった青い舌、ちゃんと見えてるのかどうか分からない小さな目、をした生き物が目の前でおばさんの体の前にぶら下がっていた。

「あ、あの、なんすか、これ？」

「これはね、ペロちゃん」

「ペロちゃんですか」

「そう、ペロちゃん。アオジタトカゲのペロちゃんです」

「はあ……」

ペロちゃんは、そのボディの逞しさというか、全身から醸し出される圧倒的な野性味を僕に誇示しながらも、顔をよく見ると何だかぼんやりとしていて目も小さいし、とてもじゃないけど子猫を襲って喰ったりするような、凶暴な人相ではない。人相というのはおかしいか。爬虫類相、とでも言ったらいいんだかなんだか。

「あの、やっぱりこのペロちゃんと子猫と一緒に飼って貰う訳にはいかない……」

「うん、ちよつとね、この子はまあ普段おとなしいんですけどねえ、食べるものはそれなりにいろんなものをがつつりと食べるもんですから、一緒に飼ってて、もし猫ちゃんがこう、ペロちゃんの前をよ

ちよち歩いてたりしたら、ぱつくりと食べられちゃうかもしれない」
「ぱつくりと」

「ええ、ぱつくり。ペロちゃんはそれはもう、なんでもぱつくり食べるからねえ」

「はあ・・・」

それじゃあ駄目だ。子猫たちの幸せを考えたら、ここに住ませるわけにはいかない。何を考えているのか分からないぼんやりとした、割と無害そうな表情をしてるのに、そのくせぱつくりとやっちゃまう、このアオジタとかいうトカゲと一緒に暮らさせるわけにはいかないだろう。

管理人さんの家で子猫たちを譲り受ける事ができない理由がとも分かりやすくはつきりしたので、それじゃあもう失礼して、今日は一日、子猫の親猫でも探したるか、講義さぼってなあ、と思って行きかけようとすると、おばさんが「ちよつと、ほら、ペロちゃん触ってみない」と言う。幸か不幸か僕はトカゲ類だったら問題なく触れるので、「あ、あ、んじゃあ」とか言いながら触らせてもらう事になった。

といつても、いったいペロちゃんのどこを触ったらいいものか。頭を触ろうにも、さつきからペロちゃんは口をぱつくり開け続けているから、そのまま手をぱつくりやられてしまうかもしれない。ペロちゃんの全身を眺め回して考え、ペロちゃんを抱えているおばさんの腕の上からひよっこり垂れている、体格に似合わない短い手を触る事にした。ペロちゃんの鋭い爪が並ぶ右手をしっかり掴むとなんだか血が出そうなので、ソフトなタッチで右手の先をつまみ、
「・・・こんにちわ」

と言った。ペロちゃんはぱつくり開けた口の奥から、
「げええええ」

と奇妙な声を僕に絞り出した。

失礼しました、と管理事務所を出て行こうとすると、管理人のおばさんが、「もしそのあたりを一通り探してみても親猫が見つからない

い時は、もう一度事務所に戻ってきなさい。子猫ちゃん達をどうするかじっくり相談に乗ってあげるから」と言った。この子たちの親が見つからなければ、おばさんとペロちゃんが事務所で僕を待ちかまえている。

僕は近所をダンボールを持って歩いた。当てもなく、というわけでもない。もうここに暮らして三年近く経つのだから、だいたいの辺に猫たちがたむろしてるのかは想像出来る。今日は生ゴミの日では無いからゴミ捨て場周辺に猫の姿は無い。すると、猫達がたむろしているとすれば、僕のアパートにほど近い公園だろう。事務所から歩いて五分ほどの場所に、ブランコやシーソーや滑り台などが揃った公園がある。地味な公園で、遊具には表面にさびが浮き出ている。この公園で子供が遊んでいる姿はあまり見かけない。夜中、カップルがベンチに座り込んで、からあげくんか何かを楽しそうに食べている姿を見かけたことがある。

公園に普段、人が寄り付かない代わりに、ここは猫のたまり場になっている。大学の友達の家が近所にあるので、この公園の前の道を通ることは日常的だ。そんなときはよく、砂場のところで茶色いのや黒いのや、白と黒のウシのような模様をしたのやら、色んな色調を身にまとった猫達が寝そべっているのを見かけることが多い。みんな、通り過ぎる僕の顔を凝視してくる。彼らの眼は家で飼っている猫のまん丸い眼とは違う。眼の奥の奥まで見通してくるような鋭い眼をしている。

公園までダンボールを持ってとつとこ歩いていった。思えば、何でもたダンボールを持ってきてしまったのだろうか。管理人さんの部屋でちよつと預かってもらって近所を散策し、この子猫たちの親猫らしい猫や、そうじゃなければ猫がたむろしている場所を見つけ次第、段ボール箱を持って行って静かに置いておき、そのうちに親猫が子供の匂いをかぎつけてやってきてくれるのを期待して草葉の陰から見守る、という方法でもよかったのではないか。

みーみー、と段ボール箱の子猫たちは小さな声でしきりに鳴いた。黒いのが白いのとじゃれあって、白と黒の綿のボールになったりする、かと思えば、4匹が何だか驚いたような目をして僕の顔をいつせいに凝視していたりして、僕はぎくりとなる。アレルギーなのか、顔面の皮膚に何か小さいものが這うような痒みを感じる。なるべく早く親猫を見つけて、この子たちを安心させてやりたい。

そして公園に着いたのだが、今日に限ってそのさびしい公園に猫の姿は一匹も無かった。空気は金木犀の香りと、何だか土臭い匂いに満たされている。乾いた明るい日光が僕と猫と地面の上に降り注いでいる。たまたま、今は猫達がいなくていいかもしれない。どこか日光を遮る事ができる涼しい場所にしばらく置いてみて、それで様子を見ようかと思った。滑り台の長いスロープの下、桜の木の根元の日陰あたりがいいんじゃないか。それで、ちよつとここにダンボールを置いてみて、三十分ぐらい置きっ放しにして、それから様子を見にこよう。

ちよつと心配ではあるけど、僕に猫の世話ができない以上、やはり親猫、もしくは子育ての経験のある猫に頼むしかない。ここに大人の猫達が集まってくれば子猫になんらかの反応を示し、この子達の身の回り世話をしてくれる猫も出てくるかもしれない。そして、この子猫たちに僕から望みがあるとすれば、一刻も早く立派に自立して、一人で立派に生き抜いてもらいたい。それだけだ。公園のどの場所にダンボールをとりあえず置いていこうか、色々と考えて歩き回っているうちに頭上に気配を感じ、顔を上げてそれを見た。

公園のすぐ傍には高压電線の鉄塔が立ちはだかっている。その鉄塔の鉄骨に黒いものが並んで？まり、僕らを見下ろしている。烏だ。六羽いる。時折、片方の羽を、ぱた、と広げ嘴で毛づくろいをするのが見える。横に並ぶ六羽の中の一匹が「かあ」と鳴くと、また2匹、どこからか烏が飛んできて鉄骨に？まる。そして計八匹の烏は皆同じものを見つめている。僕を見つめているのではない。僕の持

っているダンボールの中にいるものを見つめているのだ。その光景を見て、とてもじゃないがここに子猫たちを置き去りには絶対にできないと思ったので、鳥達に背中を向けて、そそくさと公園を出た。

仕方なく公園を離れ、再びアパートが立ち並ぶアスファルトの道を、ダンボールを腕に抱えて歩き回った。普段、近所を歩いていると、寝そべりながらこちらを凝視する猫の一匹か二匹は必ずと言っていいほど見かけるものだけど、今日に限って一匹も猫の姿が無いというのは、なんでだろう？

暑いような涼しいような、この時期特有の不思議な空気に包まれながら、アパート群に挟まれた道を通り抜けては、また一本横の道に入ってその道を通り抜けるのを繰り返した。猫の姿は無い。それどころか鳥の鳴き声以外何の音も聞こえず、人も姿も無い。そして眠い。なんだかこのまま家に帰ってベットに横になつたら、すごく気持ちよく眠れそうだった。白い子猫二匹と黒い子猫がダンボールの端っこに固まって、ひとかたまりになって寝ている。ぶちの子猫が一匹だけ元気で、ダンボールの真ん中あたりで、ネズミでも捕まえるときのように、小さくジャンプしてから自分の足元をじつと見つめるという動作を繰り返していた。

湧き上がる睡魔で頭がぼんやりとしてくる中、ダンボールを持って歩き続けていると、道の向こうから、これから大学に向かうのか、女の子が三人横に並んで歩いてくる。彼女達との距離が近づいてくると、その三人の女の子が僕の方に視線を集中させる。なんか、あの、変。そんなことを思っているような表情だった。僕は特に何も気にしていない風を装い、あくまで尋常な、ごくごく普通だと思われる表情でまっすぐと前を向き、その子たちの視線をやり過ぐそうとした。三人連れの女の子がちょうど僕の横に並んだときに、僕の右耳に「あ、猫はいってるよ、あの中、かわいい、欲しい」という声が入ってきた途端、僕はそちらの方に視線を流していた。三人の女の子と目が合った。

それから女の子たちの質問攻めにあい、「この子どうしたの？
あなたのペットなの？ えっ違うの？ え、朝起きたらベランダ
にいたの？ ふえええ。で、何でそんな風に歩いてるの？ あ、親
猫を探してるんだ。そうかそうか。で、見つけりそう。えっ、猫自
体見当たんじゃない？ 大学生ですか？ 学校は？ サボった？ 超ウ
ケる」などと言いながら、三人それぞれ違った色の猫を箱から引つ
張り上げて、かわいいかわいかわい、きやー、と奇声を発しな
がら猫とじゃれあう女の子を、箱を持ったまま見つめていた。

「ねえ、猫好きならさあ、三人で頑張つてこの子達の飼い主にな
つてくんねえかな？」

と女の子達に声をかけると、

「だめだめだめだめ、うちは駄目。追い出されます、アパート」

「私のとも駄目。親が基本、動物が嫌いで駄目」

「あたしの彼氏、猫、大嫌いだから、飼ったら殺される。駄目」

と、駄目尽くしで、

「じゃあね、がんばってねー」

と僕に声援を送りながら、彼女達は遠くなつていった。

僕は、いったん事務所に戻ろうと思った。

箱の中の子猫達は、疲れたのかみんなうずくまって眼をつむって
いた。起きたら、牛乳か何かをやらなくちゃいけないかも。再び事
務所の前に立ち、「失礼しまーす」と引き戸を横に引いて開けると、
すぐ目の前の床にペロちゃんが4つんばいになって、口を僕にパカ
アと開けていた。一瞬驚いて箱を落としそうになったが、なんとか
大丈夫で、「ただいま」とペロちゃんにあいさつをすると、「げえ
えええ」と鳴き返してきた。

「あら、ずいぶん早かったこと」

そう言つて奥からおばさんが姿を現す。僕は中に入ろうと、足元
のペロちゃんを跨いで越えようとするが、ペロちゃんは僕の足の先
に向けて頭を上げ、真っ青な口元を向けるので油断できない。

「一応、そのあたりを一通り回ってきたんですけど、駄目でした。猫自体見当たらなくて・・・」

「うーん、そう・・・」

おばさんは再び腹痛で苦しむ人のように、腕を抱えて唸り始めた。僕はそのおばさんをじつと眺めた。そのすぐそばでは、唸り続けるおばさんと、それを見ている僕の姿を、ペロちゃんがじつと顔をこちらに向け眺めている。

「・・・あの、大丈夫ですか？」

一応、声をかけてみる。

「うーん、じゃあ、あそこに行ってみようかしらね」

「あそこですか」

「ええ。それと、ちょっと聞きたいんだけどねえ、朝、この子達をベランダで見つけたとき、すぐ近くに猫はいなかった？」

「ええと、いやあ、ちょっと覚えてないです」

「そう。もしかしたらねえ、親猫があなたのベランダのあたりをうろついてるかもしれないよ、いまごろ。ベランダで生んで、その後、取りに来ようと思ってただけで、その前にあなたが見つけてパニックになって私のところに持ってきた」

「はあ」

「だから、あれえここに生んだはずなのに、って。どう？ もう一度あなたのアパートの周り探してみたら？」

「あ、いや、一応、僕のアパートの周りも歩いてきたんですけど、猫はいませんでしたね。一匹も」

「そう・・・じゃあやっぱりあそこだろうねえ、この子たちの親と引き合わせられる可能性が高いとこっていうと」

「その、あそこというのは？」

「それはね、私が連れてってあげるから、今からいっしょにちょっと行ってみましょう」

僕は再びダンボールを持って事務所の外に出た。おばさんも外に

出て、引き戸を閉めようとすると、ペロちゃんが「げえ、げえ」と鳴きながら、僕らと一緒に外に出ようとするので、「駄目、駄目」とおばさんはペロちゃんを抱え、部屋の奥のほうに消え、すぐ戻ってきて鍵を閉めた。

おばさんの言う「あそこ」とは、このあたりの町内会の集会所の建物の事らしい。いったん、住宅街の真ん中を走る二車線の道路に出て、さっきダンボールを放置するのをあきらめた公園の方角とは逆の方へ歩いていく。まっすぐ道をおばさんと連れ合って歩くと、道の両脇に並んでいたアパートとアパートの間に一軒家が見られるようになる。さらに行くとアパートはほぼ無くなって、瓦屋根の、庭の手入れをちゃんとしているようなたいそう立派な家が増えてくる。そしてさらに進むと、目の前に唐突に緑色のフェンスに囲まれた広い公園が現れる。

その公園はさっきの、人気の無いさびた遊具が並ぶ公園とは全く印象が異なり、遊具はみんな新しくカラフルでプラスチック素材でできている。公園を囲む花壇にはコスモスが咲き乱れ、ところどころに彼岸花が群生し、夏を乗り越え干からびかけた向日葵が顔を伏せて立っている。柴犬を散歩させてるおばさん。白いランニングとミズノのシューズをはいて走るサングラスのおじさん。たくさんの鞆がぶら下がる藤棚の下ベンチでおばあさんが二人座って談笑している。そして、別にわざわざここでそんなことしなくてもいいと思うのだけれど、小学生くらいの子供が三人、公園の入り口前で地べたに座りながら、下向いてゲーム機をいじくっていた。

地べたの小学生の一人が顔をこちらに上げると、「あ、おばさん、こんにちは」といって近づいてきて、残りの二人次々立ち上がり、「こんにちは、こんにちは、と言いなから寄ってきた。

「はい、こんにちわ。正太郎君、ちよつと背え伸びたんじゃないかい？」

と、おばさんも子供達と親しいようだ。

子供達の視線はすぐに、顔なじみのおばさんの横に立っている、

見たことの無い大学生くらいの怪しい男が抱えている段ボール箱に注がれる。その箱の中からはみゃーみゃーと鳴き声が聞こえてくる。子供達は興味心身で「何入ってんの、これ」と覗き込む。そこにはふわふわの4つのかたまりが、寝たりヨチヨチ歩いたり飛び跳ねたり尻尾を立てている。「うおお、すげえ」と子供達は興奮し、僕がダンボールを地面に置くか置かないかぐらいで、すでに子供達はめいめい、子猫を箱から持ち上げて、「きゃー」なんて言ってる。かわいい、かわいい、かわいい。子供達はしきりにかわいいを連呼しながら、子猫たちを手の上に載せてもてあそんでいる。いいなあ、と思う。僕もこの動物アレルギーがなければ、ああやって手の上に子猫を乗せて触れられるのに。頑張れば、ちゃんとこの子達が大きくなるまで世話をする事だって可能だ。でも、僕にはこの子猫たちの世話をする資格が根本的に無いのである。「この猫どうしたんですかおばさん？」と三人の子供の中の、太っていて、もう十月になるのに半そで半ズボンの坊主頭の子が聞く。こいつが正太郎だ。「それねえ、このお兄ちゃんのアパートのベランダで生まれちゃったのよお」とおばさんが説明する。

「お兄さんの家で生まれたんですか？」

正太郎が、顔に似合わない敬語で僕に話しかけてくる。その聞き方も変だ。女房が僕の家で子供生んだ、みたいな。面白そうな香りがする奴。

「うん、朝起きたらね、いたんだよこいつら」

「へえ、すげえ、ふえええ、かわいい」

それから僕は気になってた事をその子に聞いた。

「あのさあ」

「はい」

「君ら学校はどうしたの？ さぼり？」

「あ、いやあ、違うんですよ」

「今ね、秋休み」

三人の中の一番小さい子供が口を挟んできた。今、日曜日にやつ

てる仮面ライダーのイラストが描かれた帽子を被っていた。

「秋休み？」

「そう、秋休み」

「そんなのあるの、今？」

「あるのあるの、僕の学校にはあるの。一週間ぐらい。だから今ぶらぶらしてるんだよ」

「珍しいな、秋休みなんて。ちょっと前まで君ら夏休みで十分休んだんじゃないの？」

「いやあ、お兄さん。ちょうど今の時期はちょっとまた、休みがほしい時期なんですよね。気持ち的に」

正太郎。やっぱり面白い。

「ところでお兄さん、学校はどうしたんですか？」

「サボりだよ」

「うわあ、こいつ、サボりや、サボりや」

猫を抱えた子供達が、サボりや、サボりや、と発しながら僕の周りをまわるまわる。僕はサボり野郎、という事になってしまった。自分で蒔いた種だけだ。

「・・・あのさあ、君らの家でこの猫飼ってくれねえか？」

小学生の回転が止まった。そしてみんな、もうこの辺に住んでいる人間にとってはスタンダードな動作なのか、腹痛を我慢する人のように、うーん、うーん、唸り始めた。

「僕んところでは駄目だと思います。犬三匹もいるし、勝手に猫持つていたら怒られます」

「俺んちも駄目、ハムスターおるし」

「僕も駄目だ。めだかが食われる」

ここでも駄目尽くしを食らってしまった。

「お兄さんは子猫の飼い主を探してるんですね？」

「そう」

「お兄さんは飼えないんですか？」

「僕は駄目なの。動物アレルギーだから、触るだけで痒くなる」

「なるほど・・・」

それから僕とおばさんからちよつと離れたところで、小学生同士、小声でひそひそとなにか相談したあと、正太郎が来て僕に言った。

「なんだったら、僕らが飼い主探すの引き受けますよ」

「ええっ」

「この辺の友達に当たつてみますよ。一軒一軒。今日は暇だし、ちよつどいいや。お兄さんはちゃんと学校に行ってください」

それから小学生三人組は手持ちの猫を交換し合いながら、ふええ、かわいい、かわいい、と盛んにかわいがっていた。

「・・・あの子達に猫を渡しちゃ駄目」

唐突に僕の左耳におばさんの低い声が響いた。

「・・・どうしてですか？」

僕も自然に低い声でおばさんに問う。

「・・・あの子達ね、ああやって飼い主を探してやる、なんて言ってるけど、口だけよ、はつきり言つて。ああやって持ちながら散々連れまわした拳句、弱らせて殺しちゃうわよ、猫ちゃん」

「・・・そうなんですか」

「・・・うん。あの子達はそういう子達なの。というか、あの年代の子供はみんなそう。動物を大切にするように見えて、実際はそうじゃないの。だから駄目」

「はあ・・・」

僕は、正太郎に近づいていった。

「・・・あのさあ」

「はい」

「実はね・・・今から、僕の友達の何人かに猫を飼い主になつてくれないか相談しに行くところだったんだよ」

「ああ、そうなんですか」

「うん、それで、その友達の中に猫を引き取ってくれる人がたぶん

何人かいると思うから、この子達は大丈夫。心配しなくていいよ」

「そうですかあ。でも、なんかちよつと残念だなあ」

「……あの、もし、この猫達の飼い主が見つかなかったときはさあ、おばさんから君らに連絡があるかもしれない。その時は本当に君らのお世話になるかもしれないから、頼むよ。連絡来ないときは飼い主見つかったんだと思ってあきらめて」

「はあ・分かりました」

「んじゃあ、そろそろ友達のとこに持ってかねえといけなから、猫、ダンボールに戻して」

小学生達は「じゃあな」とか言いながら、手持ちの子猫をダンボールの中に戻し、僕は再びダンボールを抱えて持ち上げた。

「じゃあ、おばさん、連絡待ってます」

正太郎はそう言い残し、小学生三人組はそれぞれ、ハンドルまわりに色々な計器がくつついたマウンテンバイクにまたがると、ぎこぎこ、妙な音を発しながら走り去っていった。

「連絡ってなあに？」

「あの、僕があの子たちから猫を取り上げるときに、もしこの後飼い主が見つからなかったら管理人のおばさんが連絡する、っていうことにしておいたんです。今から友達の家相談に行く所なんだ、ということにしたい。で、連絡が無いときは、飼い主が見つかったということなんで、その時はあきらめて、と」

「なるほどなるほど。でも良かったあ、あの子達行ってくれて」

「はあ」

「集会所、すぐそこなのよ」

おばさんが指をさした先に集会所の建物があった。公園の一角に、まだ建てられてそれほど時間が経っていないような、比較的きれいな集会所があった。建物の横にはウッドデッキが付いていて、その上でバーベキューとかできそうだなと思った。近くに行ってみると、ウッドデッキの木材も色が煤けたりしておらず、ほのかにヒノキの

香りが漂うほど新しいものだ。

「この集会所綺麗ですね」

「この集会所はねえ、去年のちょうど今ぐらいにできたの。全然使ってないから新しいまんま」

「そうですか」

「あの子達行ってくれて良かったでしょう？　ここに猫を置きたいのに、近くにあの子達いたんじゃないもんねえ」

「そうですね。それで、猫はどこに置きましょうか？」

「猫ちゃんはね、この、ウッドデッキの下の所に置くといいわよ」

おばさんはウッドデッキの床下の闇を指差す。覗いてみると、確かにここなら雨風を防げるし、カラスに襲われることもないだろう。ダンボールを置くのにも全く問題ない、6畳ほどの広さと十分な高さがある。

「確かにここ、いいですね。ここだったら大丈夫な気がします」

「でしょう？　ここねえ、普段このあたりをうろついている野良猫たちもここをねぐらにしているのよ。居心地がいいんでしょうねえ。そういうところを見つけるのは得意だからねえ、猫は」

「ということは、大人の猫もここに集まるし、もしかしたらこの子達の親猫もここに来るかもしれないって事ですもんね」

「そういうこと、そういうこと、そういうことなのよ」

それからおばさんは「ちょっと待っててね」と言っ、集会所の裏のほうに回っていたので、僕はウッドデッキに上がって、床に箱を置いて猫を見ていた。小学生にもてあそばれたせいか、みんな静かに眠っていた。白いの二匹と黒いの一匹は、ダンボールの端っくに固まって寝ているが、黒いぶちのある子猫だけは堂々と箱の真ん中で、背伸びして手足をピンと伸ばし、うつ伏せで寝ていた。おお、なんかこいつはちょっと大物になるかもしれん。そんな事を考えていたら、背後の引き戸が開いておばさんが手に色々持って現れた。

おばさんは集会所の中から、使ってないタオルや、クリスマス会で昔使った残りだという綿、飲み水を置くための丸皿などを持って

きた。いったんおばさんが子猫を外に出して、下にタオルを敷く。猫を戻して、その間に子猫の体毛と同じくらいふわふわの綿を詰めしていく。それから箱の一角に薄く水の入った丸皿を置き、さらに古いキリンのぬいぐるみなんかも置いて、殺風景だったダンボールの中はずいぶんと見違えるようになった。

「いい感じですね」

「ね、いいでしょう？」

それから、子猫たちが寝ているダンボールをウッドデッキの床下に静かに置く。あまり奥まった場所でもなく、かといって外に出過ぎないように適度な場所へ。床下は動物の糞の匂いが微かに漂っていた。子猫たちに対して僕にできるのは、だいたいこれぐらいの事だけだ。後は大人の猫の助けも借りつつ、自分の力で生きてもらうしかない。とはいっても、家からすぐ近所だから、気になったときはいつでも様子を見にこられるだろう。

自分で飼う事ができないのだから仕方ない事だが、それでもやっぱり、段ボールを置きっぱなしにすることにためらいも気持ちもあって、しばらくの間、集会所の前にしゃがみこんでいた。

「……大丈夫かな、この子達」

「うん。大丈夫よお。だって、この辺ぶらぶらしてる大人の猫だって、元々はどこかで生まれたわけでしょう？ あなたのダンボールの中の猫と同じようにね。で、それが成長して、ちゃんと一匹で一年中外で生活して、それでも生きているんだから」

「まあ、そうですね」

「……まあねえ、中には死んじゃう猫もいるわよ、そりゃ。でも、そんなのはしょっちゅう。犬と違うんだから猫は。猫は野生動物なの。だから、死ぬか生きるかは、この子たちには常に付いて回ることであってね、それがこの子達の世界。だから仕方ない事なのよ」

「……そうですね」

「心配なら、家近いんだから、気になるんだつたらたまに見に來ればいいのよ。うちも、まあしょっちゅう行けるわけじゃないけど、

たまに見にきてあげるから」

「はい」

帰り際、おばさんは途中で仲のよい近所のおばさんと遭遇し、おばさん同士でおばさんらしい会話を始めたので、僕は、「じゃあ学校あるんで」と言っただけで別れたのだが、雲ひとつ無い快晴の空の空を見上げながらしばらく歩くうちに、もう今日は学校に行かなくてもいいかな、という気分になっていた。

それから、おばさんの言っていたことを思い出していた。さっきの小学生たちに子猫を渡すなど言っていたことについて。あの年代の子供は動物を大切にしないと云っていた事について。そういや、僕も小学生のときは色んな動物をいちいち殺してたな。アリの虫眼鏡で収束させた太陽の光を食らわせ、アリの表面が焼ける匂いを覚えてるし、爆竹でかえるを殺したし、トンボを捕まえては、「シーチキン!」と言っただけで、両方の羽を掴んだまま引っぱって、羽をひっぱがしたこともある。今、そんな事はしない。というより、できない。何であの頃は、あんなにしょっちゅう動物を殺してたんだろうか。そして、殺した事に対して何も思わなかったんだろうか。

その後、僕は子猫のところへは全くもって行かなくなってしまった。理由としては、少し忙しくなったからだ。

面白さのかけらひとつ無いくせに、毎回出席を取り、しかも僕の学部では必修で単位を取らないと卒業の見込みが立たない講義を、いつもの友人たちと真ん中よりだいたい後ろのほうの席に横に並んで座って受けていた。この友人たちにも、猫を飼ってくれないか一応聞いたのだが、結局、駄目尽くで終わっている。あまりにもつまらない講義なので、みんなそれぞれ暇つぶしの道具を堂々と机の上に並べている。公務員試験過去問題集、TOEIC、PSP、DS、などなど。僕は今更ながら、十五少年漂流記なんかを読んでいる。堂々と。そんな事をしている、教授は何も注意はせず、ただ、ぼ

そばそと講義を続けている。

その、毎回暇つぶしの時間に過ぎなかった講義でいきなり、チームを組んで調査をし、最後にプレゼン発表をする、という事態になってしまった。だったら、チームは横に並んでるこの面子でいいよ、と思っていたら、生徒の売れ残りを回避するために、教授が自分で勝手にチームを決めていて、あるうことか口も聞いたことの無い人たちが集まるそのチームで、じゃんけんの末、僕がリーダーになっちゃった。プレゼンまでの期間は短く、しかも内容がそのわりに濃いものを求められているので、僕は時間さえあれば、pcを開き、データを収集し、メンバーと集まって作業の分担や進み具合の確認や意見の食い違いや軽い喧嘩をし、短期間ながらも忙しくなっちゃった。頭の片隅にあの子猫たちのことは常にあつたとはいえ、なかなかそちらへ行く事ができなくなった。

しかしその忙しいというのも、実のところ、言い訳に過ぎない。忙しいといっても、一日の時間全てを占領してしまうほど忙しいわけではない。行こうと思えば時間を見つけてすぐにも行けるはずだ。なんせ、家から歩いて十分程の場所なのだから。でも、行かなかった。バイトから夜帰ってきて、酒でぼーっとなっている頭で、これからちよつと猫を見に行こうかと考えることは何度も何度もあったが、そんなときに限って外は雨で、なんだか体が重いように感じられて、結局、行かずじまいだった。

ダンボールをあの場所においてから、4日、5日と経つごとに、子猫の様子を見に行かなくては、という思いは強くなっていったが、それに比例するように、はっきりにいってめんどくさい、という気持ちも強くなり、僕の思考に覆いかぶさって行動を支配するのは毎回、めんどくさいという方の気持ちだった。結局、僕はあの子猫たちの保護者代わりになるうなんて気持ちは、実際は無かったのではないだろうか。ただ、動物アレルギーの元凶となる対象を、自分に近づけたくない一心で、ダンボールを抱えて子猫を置き去りにできる場所を探していただけじゃないのか、と夜中ベットで横たわり

ながら、そんな事を毎回考えいたたまれなくなる。罪悪感を感じているのなら、暇見つけていつでも好きなときに行けばいいのだがそれをせずに、朝起きれば大学に行って、黙々とプレゼン用に使えそうな資料に当たる日々が続いた。

さらに日数が経つと、もしかして、あの子達はもう死んでいるんじゃないかという思いも強くなった。親猫にも出会えず、周りの大人の猫にも相手をされず、ただ綿が詰まった箱の中で衰弱している子猫のイメージが湧く。一度見に行くべきだという気持ちは常に頭の底に沈んでおり、たまに浮上してくるが、それとは逆のネガティブな思考、例えば、箱の中で猫がみんな揃ってひからびて死んでいる、といったものはそのたびに湧き、日数が経過するうちに、そちらのネガティブな方が現実を帯びてくるだろうということも理解している。だから、気が重い。そういえば、管理人のおばさんは子猫の事をたまに見に行ってくれてるだろうか？ いや、人任せにしないで自分で行けばいいんだけど、もし見に行ったらほんとうに、箱の中で猫がみんな揃ってひからびて死んでいたとしたらどうしたらいいのだろうか。

子猫たちの入ったダンボールを部屋の真ん中において唸りながら考えたとき、「保健所」という選択も浮かんた。でも、かき消した。保健所に預けられた動物のほとんどが、最終的にどんな運命を辿る事になるか、なんとなくわかっていたから。それなら、できればペットとして一生安全に暮らせるようにするか、もしくは野性に返し、安全とはいかないまでも、この子達が本来生きべき環境に戻してあげる事が重要だと思った。

でも、もしかしたら僕は、保健所に行かせるよりもある意味で過酷な運命を、あの子猫たちに背負わせてしまったのではないか。あの、ダンボールの壁に囲まれて、そこから出ることも叶わず、子猫たちは餓えて苦しみながらじわじわと弱って死んでいるのではないか。そんな事を思うと、いつてもたつてもいらなくなり、何でもっと早い余裕がある時期に見に行つてやれなかったんだと、いまさ

らながら後悔した。プレゼンの日が近づいてくることに、時間の余裕はどんどんなくなっていた。しかも、チームのメンバーの作業ミスや怠情といった災難にも見舞われ、一日の時間全てを捧げるに近い状態と化し、子猫のところに足を伸ばすことなどできなくなっていた。

いつの間にやら、ケヤキもイチョウもコナラもカエデもすっかりと葉っぱに色付けが施され、それが冷たい風に乗ってさわさわと飛び立ち、地上に舞い降りて道路の隅に集まる。道を歩けば、とんぼがときおりぶつかりそうな勢いで前から飛んでくるので結構怖い。僕はプレゼン用の資料を持ったクリアバックを持って大学の前の坂を上っていた。生地の厚いブルゾンの下にパーカーを着込むというこの時期らしい、よくある重ね着のパターンだったが、風が前から吹いてくると、寒い。

プレゼン発表は淡々と進み、淡々と終わった。この一ヶ月の努力の結果を、ただ流し捨てているような、そんな発表会だった。教授は手を叩いてたいそう喜んでいたが、目の前に座る多くの生徒達からは何の反応も無く、みんな死んだ目をしていた。発表会の後に友人達から、ボーリングにでも行かねえか、と誘われたが、とてもそんな元気は無く、風邪引いたかも、と言って帰ることにした。まだ3時半なのに、外はすでに夕方らしくなっていた。体の芯に一本、細い寒気のようなものが突っ立っていて、本当に風邪を引くんじやないかという気がしてきた。コンビニで暖かいビタミンCが入った飲み物とあんまんを買い、家賃の安いアパートの群れが並ぶ住宅街へ入った時だった。

細い十字路で左側の電信柱の影から、黒と白の複雑な模様の、体大きい、やせてアバラ骨が浮いている猫が飛びだしてきて、右側の道へ向かって僕の前を横切って行った。それに続き、最初に横切った猫より二周り以上小さい、白の体毛にところどころ黒いぶちが撒き散らされている猫が、同じように前を横切り、次にぶちの猫

よりやや小さい、全身真っ黒の猫が、ぶちの猫に続き、最後に真っ黒の猫よりさらに小さく、一番最初に飛び出してきた猫に似て、やせてアバラが浮き出た真っ白な猫が、前の三匹のように俊敏な動きではなく、よちよちと僕の前を横切っていった。

ぶち、黒、白、という配色。そして、最後によちよちと横切っていった猫の動作に何か思い当たるような気がしてハツとなり、僕は小走りでその猫達の姿を追った。道を右に入って周囲を見渡すと、アパート前の駐輪場の自転車と自転車の間の暗がり、先ほどの猫達がひとかたまりになってうずくまっているのが見えた。僕が静かに近づいていくと、体の大きな親猫らしき猫が、かつ、と僕の顔面に鋭い視線を突き刺し、続いて、ぶち、黒、白、の三匹もそれに続いてこちらを見た。

それは、間違いなかった。あの、ダンボールに入っていた、ぶちと黒と白だった。箱の中でネズミをとるように飛び跳ねたり、真ん中で手足を伸ばしてうつ伏せで堂々と寝ていたぶちは、すっかり4本の足で地面に立ち、精悍な顔つきをしていた。横にいる親猫をそのまま小さくしたような感じた。二匹で重なり合って、ひとつの物体になっていた黒と白は、まだ箱にいた頃の面影を強く残していた。特に白は、本当は箱の中でまだよちよちしていたのに、それを無理やりたたき起こしたように頼りない印象だ。

三匹の子猫は、前に箱を持って近所をうろついたときに見せた、相変わらず驚いたような表情を一斉に向けて僕を見ていたが、しかしその眼は、もうどこを見ているのか分からない眼ではなく、すでに人の眼の奥の奥までを見通す力を持つ、そんな視線に成りかけていた。親猫が「うぎゃああああ」と真っ赤な口を開いて鳴き、暗がりのさらに奥へと潜り込んでいった。三匹の子猫は親が行ってしまった後も、硬直して僕を見ていたが、奥から「うぎゃあああ」ともう一声、親が鳴くと、びくっ、として後ろを振り返り、暗がりに潜り込んで姿を消していった。

翌日の土曜日、僕はいつもよりかなり早起きをし、マウンテンパーカーを着て、例の集会所へ向かった。公園に着くと、弱い日光が集会所の屋根とウッドデッキを照らしていた。もう、冬の景色に見える。ウッドデッキの床下の暗がりを見込むと、一ヶ月前に僕が置いた場所と全く変わらない位置に段ボール箱があった。箱の表面はやや擦り切れたり、雨に濡れたのか全体的に形が歪んでいた。僕はその箱を手前に寄せ、そして中を見た。ダンボールの中に入っていたはずの、クリスマスツリー用の綿やぬいぐるみ、水飲み用の皿などは綺麗さっぱりなくなっており、代わりにノートを破ってその上に鉛筆で物凄く小さな文字を枠にぎっしりつめこんだものが二枚重ねで置かれていた。その紙もダンボール同様、湿気を吸ったりにしてややたわんでいた。

さばりのお兄さんへ

どうも、こないだの正太郎です。お兄さんの家もれらく先も分らないんでここに手紙を置いときます。秋休みも終わって、学校にかよう毎日がつづいております。お兄さんはちゃんと学校に行ってるんでしょうか？ ほんのちよつとだけ心配しています。ぼくらが友だちとあそんでいるときにネコのなき声えがして、なんだろうと思ってここにきたら、見たことあるような箱の中に1ぴきだけ、見たことあるようなネコが入っていておどろきました。で、お兄さんの所に持っていったんですよ。そしたら、お兄さんがおどろいてました。そのあとおばさんから話を聞きました。お兄さんが友だちの家にネコをあずけにいつて、でも、けつきよく1ぴき余っちゃったそうじゃないですか？ そういうときはおばさんを通してぼくらにれんらくするはずじゃなかったんですか？ 言った本人がそれを忘れてちゃどーしようもないですね。とにかくぼくらは手分けして、

白いネコの親がわりになつてくれそんな人を何日もかけて一生けんめいさがしたんですが、なかなか世間は冷たいもので飼ってくれそうなひとは見つかりません。さいあく、ぼくの家で飼ってあげようとも思いましたか、ぼくの親も世間とおなじくつめたいこころのもちぬしなのです。もう、親にないしよで飼っちゃおうかとおもったんですが、そうだ、学校だ、と思つて学校に持つてきました。それで、学校の中庭のうさぎとかにわとりなんかがいる小屋にこっそり入れ、そこで世話をしているうちにだんだんネコがでなくなり、近藤先生にばれました。で、にわとりが食われたらどうすんだ、とかおこられたんですが、事情を説明したら、そうか、そうか、と近藤先生の方もみように納得し、放課後、ほかの先生達とそうだし、えらい上司にあたまを下げ、学校でみんなで世話をしよう、ということになりました。名まえも付けてあげました。まるちゃんといいます。なんでかというと、目が本当にまんまるだからです。まるちゃんはずくすくとそだっています。なぜか知りませんが、やたら二本足で歩こうとするのがとくちょうです。ぜひ見に来てください。

第二小学校です。

注意

たまちゃんを見に来るときは、じぜんに学校の方へ電話でれんらくをしてから、職員室で用件をはなしてきよかをもらつてから入ってきてください。そのまんま入るとつかまります。最近はやらしい人が多いからです。お兄さんくらいの人がいちばんあやしく見えます。だから気をつけてください。では。

ところどころ、文字がぼやけたノートの切れ端を読み終わり、僕は、本当に心の底から安心し、切れ端を丁寧に折りたたみ、マウンテンパーカの胸についているジッパーを開けてその中にしまった。それから、猫が入っていた空の段ボール箱を折りたたんで平べったくし、今日は資源ゴミ回収の日なので、箱を脇に抱えて公園を後に

した。

上を見上げた。とてもいい空である。

（後書き）

冒頭の朝起きてベランダ開けたら猫がいたというのは、ほぼ、私の
実体験です。その体験を元に構想を膨らまして書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4961z/>

猫の悩み

2011年12月16日21時57分発行